

主日礼拝8月28日（日）

題 「賜物を生かして互いに仕える」

テキスト：ペトロの手紙Ⅰ 4章1～11節

皆さん、おはようございます。

長期にわたるコロナ禍の中、猛暑の日々が続き身も心も委縮してしまいそうになります。大きな声で讃美歌を歌うことも、一緒に楽しく語り合い会食することも長くできていません。いささか参ってしまうようにも感じますが、そんな中、先日ふと思ったことなのですが、今は教会、キリスト者にとっても試練の時で、あたかもイエスさまが十字架にかかり、よみがえられましたが、弟子たちはユダヤ人たちを恐れてひっそりと生きていた状況とどこか似ているのではないだろうかと思わされたのです。大きな声も出せず閉じこもって過ごしていたイエスにある群れの状態です。

この世に生きておられた時のイエスさまの言葉を思い出します。マタイによる福音書18節20節「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」と。天におられる神さまは、二人または三人のわたしたちの交わりの祈りを聞いてくださっているのです。そこに主イエスがいてくださる。それが希望ではないでしょうか。

礼拝の元気さは人数にはよらない。集う人々のイエスにある喜びと、切なる求めと祈りが群れの元気となり必ず教会の将来につながるのではないのでしょうか。

人数は多く集まればやはりうれしいですが、人数が群れの元気さの印ではないということです。最近ある信徒の方と話をしていて、「戦時中の教会の礼拝は人数は少なかったが、皆、生き生きしていた。」と聞きました。それは正に厳しい時代のただ中でイエスに希望を置いていたからではないかと思わされました。

わたしは、そのような話は始めて聞きましたので驚くと共に、戦時中の教会の礼拝は、細々と淋しいものだっただろうと自分勝手に思っていたことを恥じました。イエスさまが、ここにいてくださるという熱い心が、信徒を生かし、教会を生き生きと活かす本当の力、原動力となるのだと教えられました。

今のコロナ禍の時も、教会にとっては辛い厳しい時ですが、試練と共に、希望を持って生きるという、待ち望む訓練の時ではないだろうかと思わされたのです。

さて、今日のみ言葉に聞きましょう。

◆神の恵みの善い管理者：キリスト者は管理者だと言われます。神の恵みを

頂いた善い管理者として生きるのだとイエスの弟子ペトロは離散した信徒たちに呼びかけています。

「1:キリストは肉に苦しみをお受けになったのですから、あなたがたも同じ心構えで武装しなさい。肉に苦しみを受けた者は、罪とのかかわりを絶った者なのです。」「武装しなさい。」「武装する」とは、意思を働かせ、覚悟して備えをすることです。覚悟が求められている気がしました。また「肉に苦しみを受けた者は、罪とのかかわりを絶った者なのです。」とあります。迫害で肉体に傷を負った者たちもいたと思います。また病気で痛み衰え苦しみの中にいる人たちもいたと思います。

現代でも、人にもよりますが七〇歳を超えると、何だかの病を抱えながら生きている人が増えてくると言われます。この「肉に苦しみを受けた者は、罪とのかかわりを絶った者なのです。」という言葉に心が止まりました。

「罪とのかかわりを絶った者」とは、「罪に終止符を打ってしまった。」とか、「罪の行いから逃れる、繰り返し行って来たことを止める、抑える」と言われます。つまりイエス・キリストにならって、今までとは違う新しい生活態度を身に着けて生きて行くということにつながるように思えます。

つまり、

「2:それは、もはや人間の欲望にではなく神の御心に従って、肉における残りの生涯を生きるようになるためです。」と。

古代に生き、聖人と呼ばれるようになったアウグスティヌスを思います。彼は若い日に、女性の虜になるような欲望の生活でしたが、自分でのそのことに長く苦しみを感じていたようです。ある日のこと、偶然読んだ聖書のことばに出会って、自らの態度を改めたとのことでした。

古い生き方、態度に対して。「もうそれで十分です」と聖書の言葉は迫って来ることがあるのです。この言葉は、「過ぎ去った時で十分です。」とも訳されています。

今までの習慣となっているものと断絶する。止める、離れる。それは、「ねばならない！」という命令、マストではなく、解放される、自由になれるという前向きな生き方をもたらすのです。そこには心の戦いはあると思われますが、愛なる神の御心に従って生きたいと願う祈りがあればやがて導かれていくと信じます。自由な決断、意思から来る生き方、主の光に照らされた明るい方向に生き方の向きを変えられるのです。

7節には、「7:万物の終わりが迫っています。」とあります。この言葉にドキッとされる方もおられるかもしれませんが、この言葉はイエス・キリストを信

じる者たちにとっては喜びのことばなのです。生まれたてのキリスト教には、救い主イエスが再びやって来られるという生き生きとした喜びの信仰があったのです。イエスの再臨と言われます。地上に愛なる神さまの全き救いが完成し、そしてこの世界は神のたいなる御手の中に包まれるという信仰です。「万物の終わり」人によって、恐怖にもなれば、希望の信仰でもあるのです。「万物の終わり」ということばを前に怯えて生きるのではなく、一日一日を大切に生きることが大切なのです。宗教改革者のマルチン・ルターは「たとえ明日世界が終りになろうとも、わたしは今日リンゴの木を植える。」と語ったそうです。落ちついて、今日の一日を世界を大きな御手で包んでくださっている神さまに感謝して生きるのです。そして落ちついてすべきことを行うのです。

聖書の語る救い主はイエスさまだけですが、その後の歴史では世界中で、「われこそが「メシア」である「再臨のイエス・キリストだと」いう人が、つまり「偽メシア」が登場し、多くの人々の人生を奪い、自分の支配下におくということが起こって来ました。聖書もそのことを語っています。惑わされてはならないのです。ご存知のように、今、そのことで日本でも安倍元首相の死によって正体が暴かれ、多くの被害者もあり、修める目途もたらず大問題となっています。

そして、どの人にも等しく地上の終わりは来ます。

納骨式などの時には、よくお伝えしていますが、中世ヨーロッパ時代、修道僧の中で良く使われたことわざに「メメント モリ」という言葉がありますが、その意味は「死を覚えよ」という意味です。死から逃げるのではなく、死について考えることから、生きるということも始まると言われるのです。神さまによって与えられた限りある人生を「いかに生きるか」と考えることが大切なのだと思わされます。恐怖心に支配され慌てふためくことはないのです。

「だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。

8:何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うか

らです。」万物の終わりに迫りに際しても特別のことはする必要はないのです。自分自身の人生の終わりに向かってです。「だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。」落ちついて生きるのです。あなたのそばにいる人々を大切にします。「何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。」神を愛し、人を愛する。大切にします。

9:不平を言わずにもてなし合いなさい。:「もてなし合う」には、「旅人に宿を貸す」という意味もあると学びました。今でもアラブの遊牧民には、訪問者にまずコーヒーを出す習慣があると以前テレビで観たことを思います。

最後に、 10 節のことば「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」に心を留めたいと思います。

ここでの「賜物を授かっているの」の「賜物」は、原語のギリシア語で「コレゲオ」という言葉で、今で言う「コーラス」につながる言葉のようです。人間は、創り主である神さまを賛美する心を授かっているのです。人それぞれ違った神さまに与えられた賜物があるのです。

その賜物を生かして互いに仕えなさい。小鳥のさえずりは人を爽やかにしてくれます。わたしたちの、ことばづかいや、行いや笑顔は、神さまからの賜物「コレゲオ」（提供する）コーラスなのです。お互いに響き合い、人をそして自分を生かすのです。

「11:語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。

奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。」

神の与えてくださる賜物に上下はありません。その賜物を生かして互いに仕えて行きたいと願います。

主の平安を祈ります。